

『フランケンシュタイン』と錬金術的科學

——ロマン主義的野望の危険な側面——

市 川 純

序論 現代科學と『フランケンシュタイン』の解釈

1997年2月、イギリスで初のクローン技術の実用化に成功した。¹ この時誕生した羊のドリー以降、翌年の8月にはアメリカのハワイ大学の研究チームがクローン・マウスを誕生させた。翌月には我が国日本においてもクローン牛の誕生が発表されている。このような数々の動物実験の成功は当然人間へのクローン技術の応用へと近づく重大な出来事である。ただし、クローン技術を人間に応用するといっても現実には単に人間の複製を作ることが目的ではない。ここにはバイオ・テクノロジーの最先端現場に携わる大部分の科学者達と、それを外から眺め、解釈する文系の批判者との間の生命操作に対する意識のズレがある。このクローン技術は、例えば事故で身体の一部を失った人々に対してもう一度自分の身体の一部を蘇らせることが出来るかもしれないという希望に満ちた可能性も秘めているのである。

そうは言っても、クローン技術の乱用・悪用が懸念されるのは当然のことでもある。1998年1月にアメリカの科学者が「年間500人のクローン人間を誕生させる」と宣言したり、2001年1月にアメリカとイタリアの専門家が不妊治療

目的でクローン人間作りに取りかかるとの発表をしたりと、我々に心配の念を抱かせる状況が確かに存在する。このような時代にあつて、メアリ・シェリー (Mary Shelley) の『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein; or the Modern Prometheus* 1818、改訂第3版 1831) という物語が、暴走する生命科学とそれに対する不安を象徴しているものと解釈され、絶えず発展しつづける科学によつてもたらされる人間のアイデンティティーの崩壊をこの作品の中に読みとることが頻繁に行われているのは実に自然な成り行きである。²

しかし、私は本論においてそのような現代生命科学と重ね合わされ、いわば神話化されたマッド・サイエンティストの物語としての『フランケンシュタイン』にはそれほど固執しなかつた。というのも、ヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) の科学は現代の我々が抱く一般的な科学のイメージとはやや異なり、中世的で錬金術的だからであり、今回はそのことに注目したかつたのである。

本論では『フランケンシュタイン』をサイエンス・フィクションや現代の生殖医療を予言したものとばかり捉えるのではなく、その中世的な雰囲気を含ませ持つ側面にも着目し、物語の筋に沿いながらフランケンシュタインの抱いていた科学的野望とはどのようなものであつたのかを検証し、そこに引き起こされる絶望的な出来事について論じる。それを踏まえた上で、最後にこの作品の副題である「現代のプロメテウス」とは何を表し、この作品が中世・ゴシック趣味の強かつたロマン主義文学に対してどのような立場をとるのかを考える。

I. ウォルトン船長とフランケンシュタインの出会い

物語は北極の磁力の秘密を解明するために多数の乗組員を連れて旅するロバート・ウォルトン (Robert Walton) 船長から、彼の姉マーガレット・サヴィル (Margaret Saville) 夫人に宛てて書かれた書簡によつて始まる。ウォルトンの手紙がこの小説の第一の語りであり、物語全体の大きな外枠になっている。この中でウォルトンがどのようにして北極探検へと旅立つたのか、その経歴が子供時代から語られる。

彼は子供の時から北極探検を目指し、航海に旅立つた人々の物語を伯父の蔵書から取り出しては昼も夜も読み耽つていた。一時は彼の父がその遺言で、ウォルトンは断固船乗りにはならぬと言つていたことを知つてがっかりし、ホメロスやシェイクスピアの作品にのめり込み、北極の磁力解明の野望

は薄れていったが、従兄の遺産を相続することになって再び彼の野望は蘇るのである。彼は次のように言う。

But, supposing all these conjectures to be false, you cannot contest the inestimable benefit which I shall confer on all mankind to the last generation, by discovering a passage near the pole to those countries, to reach which at present so many months are requisite; or by ascertaining the secret of the magnet, which, if at all possible, can only be effected by an undertaking such as mine. (16)³

フランケンシュタインはここで自分の探検が人類に対して多大な利益をもたらすこと、自分の探検計画がそのための唯一の方法であることを述べており、我々は彼の英雄的な自負の念を読み取ることができる。また、彼は自分の航海を、コールリジの『老水夫行』(Samuel Taylor Coleridge, *The Rime of the Ancient Mariner* 1798)⁴から引用しながら伝えている。フランケンシュタインは自分自身を「霧と雪の国」“the land of mist and snow”(19)をさまよう老水夫と重ね合わせている。改訂版第3版『フランケンシュタイン』(1831年)ではさらに『老水夫行』が北極探検への理由として示されている。“I have often attributed my attachment to, my passionate enthusiasm for, the dangerous mysteries of ocean, to that production of the most imaginative of modern poets”(184).⁵

しかし、ウォルトンは英雄的であっても孤独であり、痛切に友の存在を求めている。また自分の性質の欠点を認め、その欠点を修正してくれる友の存在の必要性を感じている。彼の孤独は老水夫とも共通しているところが多く、以下の引用は『老水夫行』からの一節で、痛切な孤独感と絶望感が示されている。

Alone, alone, all all alone
 Alone on the wide wide Sea;
 And Christ would take no pity on
 My soul in agony.(234-237)

ウォルトンの経歴と老水夫のように非常に孤独であるという状況はフランケンシュタインと共通するところが多い。ジョージ・レヴァイン (George Levine) はウォルトンのことを “a potential Frankenstein” (36) と評しており、フランケン

シュタインが引き起こしたような悲劇を再び起こす可能性を持った人物として描かれている。

ウォルトンは怪物を追跡して氷上を漂っていたフランケンシュタインを発見し、船上に救出しようと試みるが、フランケンシュタインはこの船が北極に行くのなら乗ろうという条件付きで助けてもらう。これは後に明らかになるように、北極まで怪物を追跡してきたからである。そしてウォルトンはこの男から世にも奇妙な物語を聞くことになる。この小説の第二の語りが始まるのである。

フランケンシュタインは自分の恐ろしい物語を始めるに際し、次のような前置きを述べている。

You seek for knowledge and wisdom, as I once did; and I ardently hope that the gratification of your wishes may not be a serpent to sting you, as mine has been. I do not know that the relation of my misfortunes will be useful to you, yet, if you are inclined, listen to my tale. (25)

フランケンシュタインとウォルトンが共通に求めているのは知識と英知である。しかし、フランケンシュタインはそのために悲劇的な体験をすることになり、この体験談を参考にして欲しいと言うのである。ここで注目したいのは、フランケンシュタインは自分がこれから語る怪物の創造とそれを捨て去ってしまったこと、そのために自分の身内の者達が次々と殺害されてしまったことについて、自分の罪を心から反省しているわけではないことである。実は、フランケンシュタインは自分の作り出した怪物によって身内が殺されたことについて、自分の行為を“irrevocably it is determined” (25) と思いながらも反省してはおらず、そのためウォルトンの北極探検をあえて止めようとはしていない。これは小説の最後においても同じである。単に度を越えた知識の習得やその実践をひかえろという風に容易に図式化できる道徳的・教訓的物語ではないのである。ここに『フランケンシュタイン』が単に人間の行き過ぎた科学的知識の探求や、神の領域を侵すことを戒める道徳的物語とは一線を画す深みがあると言えるのではないだろうか。

それではフランケンシュタインはどのようにして怪物創造の知識を習得するに至ったのか、またそこから何が引き起こされたのかを以下の章から論ずる。

II. フランケンシュタインと錬金術

フランケンシュタインは生物学の研究に没頭する以前は子供の頃から錬金術に凝っていた。彼は父の蔵書からコーネリウス・アグリッパ (Cornelius Agrippa) やパラケルスス (Paracelsus)、アルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus)⁶ といった有名な錬金術師達の著作を密かに読み耽っていた。これらの本から得られた錬金術の知識は彼を後の怪物製造へと至らしめる重要なきっかけとなる。フランケンシュタインの父はそのような書物を読むことは無駄であると一喝するけれども、フランケンシュタインは次のような夢を抱く。“what glory would attend the discovery, if I could banish disease from the human frame, and render man invulnerable to any but a violent death!” (30) フランケンシュタインは何も錬金術そのものにはまって金の精製に携わったのではない。彼はそこまで時代錯誤をしているわけではないが、錬金術的な欲望は科学、特に生物学と結びつき始めている。中世的で秘術めいた錬金術と近代的な科学との間には大きな差があるようにも思われるが、フランケンシュタインの目指す科学の方向性は、現代の我々がイメージする近代科学とは異なっている。フランケンシュタインはすぐ後に次のようにも述べている。“The rising of ghosts or devils was a promise liberally accorded by my favourite authors, the fulfilment of which I most eagerly sought” (30); ここで述べられている幽霊や悪魔の存在など、反科学的なものである。彼は後に落雷を目撃したことによって、電気科学や数学に魅せられ、錬金術師には興味を持たなくなるけれども、これは簡単に中世的擬似科学から近代的な科学に移行したことを示しているわけではない。後にインゴルシュタット (Ingolstadt) の大学に入学し、一人部屋にこもって人造人間を作り上げたフランケンシュタインは、どうしても最近のクローン技術やDNA解析などの先端技術と重ね合わされ、今我々のいる現代の科学者像を投影されやすいのだが、彼の思想は必ずしも現代的な科学者像とは似通ってはいない。また、クロスビー・スミス (Crosbie Smith) が以下に述べているように、フランケンシュタインは19世紀の一般的な科学者像とも異なっている。

つまり、フランケンシュタインは、その当時の正統とされる科学者のイメージに合わせて作られたのではなく、科学者としては「異常な」人物として描かれているのである。したがって、メアリ・シェ

リーが作り出した主人公は、十八世紀後半から十九世紀前半のオーソドックスな科学者のイメージからはずれているだけではなく、現代の科学者のイメージともさらに大きな開きがあることをここで強調しておきたい。(55)

メアリが描いている科学者は当時一般的に考えられていた科学者のイメージとは異なった異常な科学者であり、『フランケンシュタイン』がそのまま当時の科学全般に対する不安を描いているとは言えないのである。それでは『フランケンシュタイン』の中世的側面を持った科学と近代的科学ではどのような違いがあるのか。この科学観の違いについて澤井繁男は次のように述べている。

オカルト的特質をもつ魔術、錬成術、占星術の知が近代科学の知と対照的なのは、近代科学の方が公開的共同作業的、開放的明るさを持つものに対して、オカルトの方は秘密的孤独的、閉鎖的であることである。オカルトという言葉はイタリア語 *occultare* (隠す) の過去分詞 *occulto* (隠された) に由来するが、字義どおり閉鎖的内的的暗さがつきまとう。(40)

フランケンシュタインの秘密裏の怪物製造科学が後者の立場に属することは疑う余地が無い。また、彼がインゴルシュタットで出会った二人の教授の特質における相違も、彼の科学観を証明する上で手がかりとなる。最初に出会った自然科学者クレンペ (Krempe) 教授は錬金術師の本を読んでいたことを激しく非難し、全て最初から勉強し直すように忠告し、フランケンシュタインは彼に嫌悪感を抱く。それに比して、ヴァルトマン (Waldman) 教授はフランケンシュタインを温かく受け入れ、科学の発展には錬金術師達の努力の積み重ねがあったことを認める。フランケンシュタインが好感を持ったのは当然後者の方であった。

ヴァルトマン教授の考えに励まされ、研究に勤しんだフランケンシュタインは危険な領域にまで踏み込んでしまう。彼の研究目的は、“discovering the cause of generation and life” (39) から “bestowing animation upon lifeless matter” (39) へと加速してしまうのである。彼が怪物創造のために設けた孤独で閉鎖的な研究室は錬金術師の工房を思わせ、秘術的な雰囲気満ちている。

「11月のある陰鬱な夜」“on a dreary night of November” (42)、フランケンシュ

タインは遂に怪物の創造に成功する。屠殺場や、納骨堂、墓地というゴシックの舞台から材料集めに奔走し、死体の寄せ集めに生命を吹き込む事に成功した。これまで彼を錬金術との関連で述べてきたが、この死から生への移行も錬金術との関わりから説明する事が出来る。その鍵は「ウロボロス」である。

ウロボロス——われとわが尾を噛む蛇。錬金術師たちにとってつねに重要なイメージであった——というシンボルは、このような円環を表している。万物は循環し、時間は円環構造をしているという考え方は、錬金術師にとって自明のことであり、論議の対象にすらならなかった。(アンドレーア・アロマティコ [Andrea Aromatico] 35)

錬金術は昔から象徴性が強く、その統一主義的な思想はこのウロボロスや両性具有者（ヘルマフロディトゥス）の絵によって多数描かれている。金を精製する作業行程も寓意的な絵画によって描かれることは多々あった。⁷ ウロボロスという円を描いて自らの尾を噛む蛇もその一つであり、生命の問題を当てはめてみればそこに生ずるのは死から生への循環である。フランケンシュタインは死者の肉体に生命を吹き込んだ。それは電氣的、科学的な雰囲気に含まれてはいるけれども、彼の行ったことは非常に錬金術的でもあると言えるのだ。また、錬金術という言葉は金を生成することをのみ我々に想起せしめるが、実はそれだけではなく、金を精製するために必要とされた「賢者の石」は生命にも大きな影響を与えるものと思われていた。

賢者の石はあらゆる生物の病を治し、健康を維持する万能薬として使用される。また、植物を急激に成長させる力も持っている。一方、アルコールに溶かした液体状の賢者の石は、真のアクウア・ウィタエ（生命の水）であり、飲用可能な金の溶液であり、東洋の錬金術師たちの言うところの不老不死の靈薬なのである。(アロマティコ 74)

フランケンシュタインが目指していたものは方法こそ異なっていたが、錬金術師と同じなのである。人間の病を追放し、全ての人間の必然である死に勝利することは子供の頃のフランケンシュタインが抱いていた夢であった。これは彼にとっての「金」、つまり人類にとって莫大な利益を与えるはずのも

のであった。しかし、実際彼が作り出したものは莫大な富や人類の明るい未来を拓く「金」ではなく、彼とその近親者を滅ぼし、人類の脅威となる怪物であったのだ。クリス・ボルディック (Chris Baldick) はヴィクター (Victor) と勝利 (Victory) を関連づけているが (86)、ヴィクターが勝利を手にすることが出来なかったのは非常に皮肉めいており、彼のような人間に対する著者の非常に痛烈な批判精神を読み取ることが出来る。

怪物を作り上げてしまったフランケンシュタインは突然気分を変えてしまう。それまで寝るのも惜しんで研究に打ち込み、死体に生命を吹き込むことに没頭していたのだが、死体が動き出し黄色い目を見開いた時、彼の心を満たしたのは喜びではなく、恐怖であった。自分が今まで行っていたことの罪深さ、恐ろしさによろやく気が付いたのである。錬金術師達は生涯かけて金の精製に取り組んでいたが、フランケンシュタインは早くも若い時実験に成功し、その時初めて自分の行為の恐ろしさに気付く。ここでフランケンシュタインは生命の神秘を追求することを放棄し、自分の作った怪物さえも無責任に捨ててしまう。ここから先描かれる一連の恐怖物語は禁断の知識を得た若い錬金術的学者に下された怪物の復讐劇である。

震え上がったフランケンシュタインは研究室を逃げ出し、病気になってしまう。友人ヘンリ・クラヴァル (Henry Clerval) の看病を受け、次第に健康を回復し、自然探索をしながら醜い怪物とは対照的な自然の美しさに触れる事によって、精神的な落ち着きを取り戻したのであった。

フランケンシュタインが研究室を飛び出している間に怪物は逃げ出したのだが、彼は自分の視界から怪物が消えたことを大喜びしている。だが、巨大な怪物を世の中に逃がすことは決して喜ぶべき事ではなく、尋常な人間であれば不安であるはずだ。この時のフランケンシュタインは怪物制作の忌まわしい記憶を故意に無くそうと努めていたと考えられる。だが、あの恐ろしい光景の記憶は容易に消し去ることなどできる筈もなく、無意識の世界へと抑圧されていくだけなのである。

怪物の創造から二年。父から不幸を告げる手紙が届けられた。フランケンシュタインの弟ウィリアム (William) が何者かに殺されたというのである。早速彼はジュネーヴ (Geneva) に帰るのだが、その途中で二年前の抑圧された悪夢を思い出す事になるのである。嵐の中のモン・サレーヴ山 (Mont Salève) を登る不気味な影を見つける。それはまさしく自分の創造物であった。

The figure passed me quickly, and I lost it in the gloom. Nothing in human shape could have destroyed that fair child. *He* was the murderer! I could not doubt it. The mere presence of the idea was an irresistible proof of the fact. (56-57, 斜字体は原著者)

二年近くの間抑圧していた自分の忌まわしい怪物創造の記憶は蘇り、怪物がウィリアムの殺害犯であることを確信するのである。ここで創造物と創造者の追跡劇が始まれば、これ以上の悲劇は起こらなかったのだが、さらなる悲劇がフランケンシュタインを待ちうけていた。それはフランケンシュタイン家の養育係であるジュスティヌ (Justine) が状況証拠から犯人扱いされてしまったのである。

彼女が無実であることは確かであった。彼女を知るものは皆そのことを疑わなかった。特にフランケンシュタインは自分の創造物が犯したことを確信していた。フランケンシュタインの父は彼女の裁判を間近に控え、悲嘆に暮れる養女エリザベス (Elizabeth) に向かい、次のように言った。“‘Sweet niece,’ said my father, ‘dry your tears. If she is, as you believe, innocent, rely on the justice of our judges, and the activity with which I shall prevent the slightest shadow of partiality’” (60). ボルディックが指摘しているように (88)、“Justine” は “justice” なのである。ジュスティヌの名は正義を象徴的に表している。しかし、皮肉にも彼女が受けた仕打ちは不正以外の何物でもなかった。彼女は聴罪司祭に脅され、無理やり自白を強要させられたのである。“Ever since I was condemned, my confessor has besieged me; he threatened and menaced, until I almost began to think that I was the monster that he said I was” (64). ウィリアムを殺したのは怪物であるが、ジュスティヌに嫌疑がかけられ、さらに彼女自身が怪物扱いされている。エリザベスが彼女の名前を叫ぶたび、我々は「正義を！正義を！」という悲痛な哀訴を聞く思いがする。フランケンシュタインはもちろん本当の殺人犯を知ってはいたが、自らの怪物創造譚を語ったところで狂人扱いされるために孤独な苦悩の日々を強いられる。そしてジュスティヌは処刑される。

無実の彼女に対する極刑判決は極めて不公正であり、この逸話は J = J・ルセルクル (Jean-Jacques Lecercle) が指摘しているように (95)、メアリ・シェリーの父、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) の社会派ゴシック小説『ケイレブ・ウィリアムズ』 (*Caleb Williams: or Things as They Are* 1794) の影響

が濃厚である。この作品の中で主人公のケイレブは自分の仕える主人フォークランド (Falkland) が殺人を犯しているという秘密を好奇心に駆られて暴いてしまう。これを知ったフォークランドはケイレブを追跡し法的な迫害を与え続けるのである。この小説全体がフォークランドと秘密を握るケイレブの逃走劇にもなっており、生命原理の秘密を握るフランケンシュタインと怪物との逃走劇と重なるところも多々ある。

ただし、『ケイレブ・ウィリアムズ』において迫害を受けているのは好奇心に駆られて主人の秘密を暴いたケイレブであるが、『フランケンシュタイン』において最も気の毒で、最も悲劇的に迫害されるのはフランケンシュタインのように好奇心に駆られて生命の秘密を知った者ではなく、その周辺の無実の人々である。裁判が不正であったのは確かであり、これは当然弾劾すべきものである。またこれは怪物による巧妙な冤罪なのだが、この怪物を好奇心に取りつかれて創造した大犯罪の張本人はヴィクター・フランケンシュタインである。そのために正義は否定され、無実の者達が殺されたのであり、全ての悲劇はフランケンシュタインにその根本原因がある。

フランケンシュタインは苦悩と絶望にさいなまれながら、家族と共に悲しみを癒すためにアルプスの谷間へと旅立つ。そしてある朝一人で氷河を望むモンタンヴェール (Montanvert) の頂上を目指して歩き出す。これは自然に逆らったことによって与えられた苦悩を取り除くために、自然に再び接近するということである。反自然によって感じる絶望は親自然によって癒されるのである。だが、そこで彼が一時の開放感を得て間もなく見たものは反自然の塊、自らが生み出した怪物であった。

フランケンシュタインにとって怪物は自分の子に相当するのだが、フランケンシュタインは怒りと憎しみを込めて怪物を “Devil!” “vile insect!” “the daemon” “Abhorred monster! fiend that thou art” “Wretched devil!” (73-74) と呼ぶ。彼には自分の生み出したものに対する愛情というものがなく、この怪物を肉親を奪った殺人犯としてこの世から消し去りたいと思っている。

「賢者の石」すなわちフランケンシュタインにとっては死体に生命を吹き込む知識を手にし、それを実践してしまっただけからは、もはやかつての錬金術の野望はなく、実験室での思い出は消去すべきものであった。事実上彼の実験は成功しているのだが、自らが作り上げたものを忌避し、管理する能力のないフランケンシュタインは錬金術師としては失格である。彼は錬金術的な野望を生物学的な根拠に基づいて現実化したことにより、怪物の復讐を受けて破滅の道を

辿ることになる。中世的な夢を近代科学の手法によって実践することの非常に危険な側面がここには描かれている。

呪いの言葉を浴びせかけるフランケンシュタインに向かって怪物は次のように言う。“I was benevolent and good; misery made me a fiend. Make me happy, and I shall again be virtuous.”(74) この理屈はルセルクルが主張するように(48)、ジョン・ロック (John Locke) の「タブラ・ラサ」“Tabula Rasa”の考え方に基づいている。もともと白紙状態で、善意を持っていた怪物の精神は、誕生後に数々の悲劇的出来事に遭遇する事によって邪悪なもの、強暴なものへと形成されたのである。従って、怪物の心の論理は次のようになる。

善 + 悲劇 = 悪

そして怪物が創造主に要求するのは、上の式を逆算した次の論理に基づく。

悪 - 悲劇 = 善

怪物は怒りに狂うフランケンシュタインを説得し、自分が世間からの迫害によっていかにして邪悪な存在へと変貌したかを語り出す。この小説の第三の語りが始まり、視点はフランケンシュタインから怪物へと移行する。

Ⅲ. 怪物が怪物となるまで

怪物は実験室を抜け出してからことごとく悲痛な体験をしている。その醜い容貌故に村人からは恐れられ、攻撃を受け、無残な思いをしながら人目を避け、ひっそりと暮らすしか生活する方法は無かった。しかし、それでも怪物の心はまだ善良であり、身を寄せた小屋の近くの家に居住しているド・ラセー (De Lacey) 家の人々にこっそりと薪を集めては届けたりなどしていた。怪物はこの家の人々の会話から、次第に言葉を学び始めることが出来た。彼等がアラビア娘サフィー (Safie) に言葉を教えているのを見ながら自分も驚異的な速さで言語を学び取った。怪物が言語を習得する過程は幼児期のそれを思わせる。そのため、幼児期をとうに過ぎたサフィーよりも圧倒的な速さで言語を身につけることが可能であったのである。

しかし、このような知識を身につけることは必ずしも怪物を幸せにしなかつ

た。これはフランケンシュタインの得た知識と同様で、知識を得ることは必ずしもその人を幸せにはしない。ある日怪物は三冊の本——『失樂園』(*Paradise Lost*)、『プルターク英雄伝』(*Plutarch's Lives*)、『若きウェルテルの悩み』(*Sorrows of Werter*)⁸——を手に入れるのである。これらを夢中になって読んだ怪物は次第に複雑で、抽象的な思考をもすることが可能になり、それまで曖昧模糊としていた感情を言語によって考え、表すことが可能となった。特に彼の心を打ったのは『失樂園』であり、自らの境遇と重ねて次のように語る。

Like Adam, I was created apparently united by no link to any other being in existence; but his state was far different from mine in every other respect. He had come forth from the hands of God a perfect creature, happy and prosperous, guarded by the especial care of his Creator; he was allowed to converse with, and acquire knowledge from beings of a superior nature: but I was wretched, helpless, and alone. Many times I considered Satan as the fitter emblem of my condition; for often, like him, when I viewed the bliss of my protectors, the bitter gall of envy rose within me. (96)

怪物はイヴを授かる以前のアダムのように孤独な創造物であった。しかしアダムは自分を保護してくれる創造主である神の存在を感じる事が出来る。それに対して怪物は自分が何から作られたのか、誰によって作られたのかが全く分からず、しかも非常に醜い姿に作られている。そこでアダムよりもサタンの方が自分により似つかわしく思われたのである。

しかし、自分の出生については全く知らなかった方がむしろ幸せであったかもしれない。怪物はこの後すぐ自分の誕生についての知識を得るのだが、それは自分の着ている服のポケットにフランケンシュタインが書いた怪物制作メモを見つけ、恐ろしい誕生の秘密を知るに至ったのである。言語を身につけることにより、自分の存在さえも呪わしいものになってしまったのであり、それは怪物の次の言葉にも端的に表れている。“Increase of knowledge only discovered to me more clearly what a wretched out cast I was.” (97) 知識を得たことに起因する不幸はここにも表明されているのである。そして怪物の孤独感はサタンのように強く、絶望的だ。やっとの思いで勇気を振り絞り、ド・ラサーの人々の前に姿を現しても、再び悲鳴と攻撃を浴びせられてしまう。ルセルクルは怪物

の孤独について次のように分析している。

家族、故郷、幼年期を持たぬものとして創造されたために、モンスターは追放者である。いやそれどころかもっと悪い。追放された者には少なくとも何らかの記憶があるが、モンスターはそれさえも奪われているからである。[...] 彼は神から二重の意味で見捨てられている。彼を創造したのは神ではなく、しかも彼は神に逆らって創造されたのだからである。(48-49)

怪物はその創造主だけではなく、今や全ての人々から追放された絶望感から、復讐心が芽生え始める。ド・ラセーの人々には親近感が残っていたが、彼らが二度と怪物の姿を見たくないがために、家を出ていったと言う話を聞き、彼らの家に放火をする。そして、フランケンシュタインの実家へと足を向けるのである。今度は怪物がフランケンシュタインに呪いの言葉を浴びせることになった。“Cursed, cursed creator!”(100) “Unfeeling, heartless creator!”(103) そして彼の復讐の最初の犠牲者となったのは幼児ウィリアムであった。この子がフランケンシュタインの名を口にするや否や、怪物の復讐心はメラメラと沸き、絞殺してしまう。さらにその犯行の跡をジュスティーンになすり付けたのであった。

一連の出来事を語り終えた後、怪物は自分に女性の伴侶、しかも自分と同じ醜い伴侶を作ることを求める。怪物の論理では、幸せを得ることによって再び善良な性質に戻ることができる。フランケンシュタインも初めは怪物の要求には従わなかったが、その話には心打たれるものがあり、二度と人類の前に現れないことを条件に女性の怪物制作に同意する。そして夜空を見上げてこう言うのであった。“Oh! stars, and clouds, and winds, ye are all about to mock me: if ye really pity me, crush sensation and memory; let me become as nought; but if not, depart, depart and leave me in darkness” (110). 以前フランケンシュタインは絶望的な気分陥った際に、自然の壮麗な風景を見ることによって気分が癒される場面があったが、これからまた新たに反自然的な作業に取り組むフランケンシュタインにとって、自然は自分を恨むものである。その考えが夜空を見上げた時に明らかになったのである。

フランケンシュタインは新たに女性の人造人間を作るため、イングランド(England)へと向かった。これは最新の科学的知識を得るためである。その途

上で美しい自然の景観を目にするのだが、彼の自然に対する態度は、付き添いでやって来た親友のクラークヴァルとは対照的である。

“This is what it is to live;” he [Clerval] cried, “now I enjoy existence! But you, my dear Frankenstein, wherefore are you desponding and sorrowful?” In truth, I was occupied by gloomy thoughts, and neither saw the descent of the evening star, nor the golden sun-rise reflected in the Rhine. (114)

美しい自然の姿に感動し、生きることを実感できるクラークヴァルとは対照的に、自然の摂理を犯し、さらにこれからもう一体の人造人間を作ろうとするフランケンシュタインにとって、自然の姿を見ることは激しい罪悪感と自責の念を呼び覚ますものである。ここでもフランケンシュタインの自然を犯すという行為が彼の精神に及ぼす影響を、メアリは風景を目前にした時の彼の態度に描いているのである。彼は自然の美を讃えることは到底できず、その資格さえない。しかし、ウィリアムやジュスティーヌが殺害された事に関しては、やはりその責任は怪物にあり、自分は無実であるとあくまでも正当化しているところがある。それは彼の次の言葉から明らかである。

I was guiltless, but I had indeed drawn a horrible curse upon my head, as mortal as that of crime. (120)

Justine, poor unhappy Justine, was as innocent as I, and she suffered the same charge; she died for it; and I am the cause of this—I murdered her. William, Justine, and Henry—they all died by my hands. (137)

自分のせいで無実の者達が不幸に遭い、そのことは認めながらも、あくまで自分は“guiltless” “innocent”であると、非常に苦しい弁明をしている。自分の呪われた運命を歎き、絶望のどん底に落とされた気分ではあっても、どこか自分の罪を認めきれていない発言である。フランケンシュタインは自分が作った怪物のために身内の者達が殺されたことは承知しており、後悔はしているのだが、自分の罪の責任に対する反省が足りておらず、自分の行った事があまりにも行き過ぎていたという意識は弱い。人間は傲慢に自然の神秘を操作してはい

けないという考えには至っていないのである。

フランケンシュタインはスコットランド (Scotland) で女性の怪物を作りかけたが、果たしてこの女性があの怪物を好きになるのかどうか、以前怪物が言っていたように二度と人類の前に現れなくなるのかどうか、もしも怪物の子孫が生まれたらどうになってしまうのか、という恐れを抱き、作りかけの女性版人造人間を破壊してしまう。約束を破られた怪物はフランケンシュタインへの復讐を続けることになるのだが、フランケンシュタインの考えたことは決して間違っているとは言えない。怪物が子孫を残して繁栄することは非常に恐ろしい事であり、怪物が永遠に人類と接触をとらないように距離を保つというのも難しいことである。では、裏切られた怪物がその後フランケンシュタインの親友クラーク・ヴァルと、従妹で結婚相手のエリザベス (Elizabeth) を殺害したことが正当化されるかと言うと、それも間違っている。たとえ人々に迫害され、創造主に約束を破られたとしても、人を殺しても良いという結論にはならない。だが怪物はもはや善的存在ではなく、いかなる説得も理屈も通じない邪悪な真正正銘の怪物なのである。彼は復讐の鬼と化しているのだ。怪物がこのような存在になったことは、その生まれつきの醜悪な容姿が原因であった。彼を見た人々はみな恐れ、攻撃を加えた。しかし、生来備わったその醜さは修正しようのない運命であった。怪物を復讐の化け物にしたこれらの理由も、そもそもフランケンシュタインが死体を寄せ集めて醜い怪物を創造したことにより、この作品の全ての悲劇はフランケンシュタインによって引き起こされているのである。それでいてしかも、フランケンシュタインは最後まで反省しきれてはいない。このような人物の最終的な運命は死しかないのである。

フランケンシュタインが怪物の女性伴侶を破壊して間もなく、クラーク・ヴァルが殺害される。一時はフランケンシュタイン自身が殺人犯なのではないかと嫌疑を掛けられたが、ジュスティーヌと違って無実が認められ釈放される。彼はもちろん本当は無実ではない。主犯格と言ってもよい。ここでもし、フランケンシュタインが処刑されていれば、彼の不幸はより軽くなっていたであろう。だが、この先死よりも辛く苦しい人生を歩まねばならず、このことがまた怪物のより効果的な復讐となっている。

クラーク・ヴァルの次に殺害されたのはフランケンシュタインの結婚相手であるエリザベスであった。更に、度重なる不幸のためにやつれ果てた父アルフォンス (Alphonse) も亡くなってしまふ。怪物によって次々に近親者を殺害された (アルフォンスは間接的にはあるが) フランケンシュタインは怒り狂い、つ

いに判事に訴えるが、彼のしきりの説得も虚しく信じてはもらえない。そこで彼は殺された無実の者達が葬られている墓場で復讐を誓うのであった。この誓いは怪物にとってはむしろ喜ばしいことであり、彼は次のように言う。“I am satisfied: miserable wretch! you have determined to live, and I am satisfied.” (149) 怪物の目的はどこまでも創造主を苦しめ、復讐することであり、悲しみに暮れて自殺を図るようなことは怪物の望むところではない。フランケンシュタインは怪物を追って北極まで登りつめたが、肉親の死を復讐するために辛く厳しい状況を強いられている彼は、実際怪物に復讐されているのである。どこまでも追いかけてくるフランケンシュタインは怪物の思う壺となっている。だからといって怪物をそのまま放棄しておくにもいかず、他の選択肢はないのであり、これは全てフランケンシュタイン自業自得の結果なのである。

ここまでに至る怪物の復讐は実に巧妙であり、ウィリアム、ジュスティーン、ヘンリ、エリザベス、アルフォンスと一連の被害者は次第にフランケンシュタインとの親密度が高くなっている。怪物の復讐はじわじわと次第にその苦しさを増して創造主に迫っているのである。しかもその度にフランケンシュタインの復讐心は燃え上がり、これは別の見方をすれば生きる目的にあふれていることでもあって、怪物はフランケンシュタインが復讐に燃えて生き続ける限り、いつまでも自分が復讐することができるのである。ウィリアム・ヴェーダー (William Veeder) は殺害された者達の名前の頭文字に注目し、逆アルファベット順になっていることを指摘している (153)。彼に拠ると、ウィリアム (William)、ジュスティーン (Justine)、ヘンリ (Henry)、エリザベス (Elizabeth) と続き、最後に頭文字が“A”であるアルフォンス (Alphonse) より前に戻る人物はおらず、父親の名前がわざわざ“A”で始まるアルフォンソという名で、しかも彼の死が最後に置かれているのは意味があるというのである。著者メアリがそこまでこだわって近親者の殺害を配置したのかどうかは疑わしいが、次第により緊密な関係を持っている人物が殺害され、最後に怪物とフランケンシュタインが一對一で対決する構図に至るプロセスは大きな緊迫感を生み出し、彼の苦しみが次第次第に増していることは確かである。

一連の悲劇を語り終えたフランケンシュタインはウォルトンに向かって次のように言う。

“Are you mad, my friend?” said he, “or whither does your senseless curiosity lead you? Would you also create for yourself and the world a

demoniacal enemy? Or to what do your question tend? Peace, peace! learn my miseries, and do not seek to increase your own." (154-155)

この発言だけに注目するならば、フランケンシュタインは自らの体験を反省し、好奇心に駆られて人間には禁じられた自然の摂理に関する知識を得ることの危険性をウォルトンに説いているようにも思われるのだが、今まで述べてきたようにフランケンシュタインという人物は完全に自分の行いを反省してはいない。知識を探求することに対する彼の見解は混乱しているところがあり、まだ人間の限らない野望を棄てることはできない。それは、船員達がウォルトン船長に向かって北極探検を取りやめるように願い出た時に表明されている。

What do you mean? What do you demand of your captain? Are you then so easily turned from your design? Did you not call this a glorious expedition? and wherefore was it glorious? Not because the way was smooth and placid as a southern sea, but because it was full of dangers and terror; because, at every new incident, your fortitude was to be called forth, and your courage exhibited; because danger and death surrounded, and these dangers you were to brave and overcome. For this was it a glorious, for this was it an honourable undertaking. You were hereafter to be hailed as the benefactors of your species; your name adored, as belonging to brave men who encountered death for honour and the benefit of mankind. [. . .] Do not return to your families with the stigma of disgrace marked on your brows. Return as heroes who have fought and conquered, and who know not what it is to turn their backs on the foe. (158)

このフランケンシュタインの言葉は怪物創造にいそしんでいた時の彼の様子と全く変るところがない。全く反省の色が見えない。自分は研究を貫くことによって人類に大きな貢献をし、英雄になることができるという強い思い込みがある。このような考えの非常に危険な側面は既に彼の悲劇が証明しているはずなのだが、フランケンシュタイン本人にはその自覚がないのである。我々はこの物語を読むことによって、人間の行き過ぎた好奇心に対する警鐘を鳴らされている思いがするのだが、肝心のフランケンシュタイン自身は自

ら作り上げた怪物による復讐に苦しむだけであって、そこで反省して悟りを得てはいないのである。

だが、ウォルトンは違う。フランケンシュタインは知識の探求について自らの体験に基づいて改心するところはなかったが、ウォルトンは彼の話聞いて明らかに反省するところが大きかった。彼がフランケンシュタインの話聞いて自分の知識を求める好奇心を反省したと直接的に描かれているわけではないけれども、自分の探検によって船員達の命を奪うようなことは避け、北極の磁力解明を諦めて南下することを決意するのである。このウォルトンの存在によって『フランケンシュタイン』は人間の飽くなき探求心の危険性をより明瞭に告発することができる。この悲劇的物語を通して改心したのはフランケンシュタインではなくウォルトンのみであり、彼の語りがこの小説全体の大きな枠構造をなすことにより、読者もウォルトンと共に人間の好奇心の危険性を悟るようにと導かれているのである。

怪物創造秘話とそれに続く一連の悲劇を語り終えたフランケンシュタインは次第に衰弱し、帰らぬ人となる。これにより怪物は復讐の対象を失い、同時に生きる目的も失う。怪物はウォルトンに自殺をほのめかして氷の大地へと姿を消す。結局のところ、フランケンシュタインは自分の行いを反省するわけでもなく、殺された者達の復讐を逃げるわけでもなく、精神的にも体力的にも限界を迎えた結果死んでしまうのだが、我々は彼のような人間をどのように捉えたらよいのだろうか。フランケンシュタインはウォルトンのように単純に自分の好奇心を反省する人物と解釈することはできない。だが彼は H.G. ウェルズのモロー博士 (Herbert George Wells, *The Island of Doctor Moreau* 1896) のように、自分の野望を貫き通して幾つもの動物人間を作り出すマッド・サイエンティストとも違う雰囲気を持っている。次章ではフランケンシュタインとは何物なのかを検証し、この作品の持つ意義について論じる。

IV. 現代のプロメテウス

ここで『フランケンシュタイン』の副題である『現代のプロメテウス』 (*the Modern Prometheus*) を手がかりに、フランケンシュタインという人物は一体何物だったのかを考えてみようと思う。

Oxford English Dictionary second edition ではプロメテウスについて次のように定義されている。

Prometheus

1. Gr. Myth. Name of a demigod (son of the titan Iapetus), who was fabled to have made man out of clay, and to have stolen fire from Olympus, and taught men the use of it and various arts, for which he was punished by Zeus by being chained to a rock in the Caucasus where his liver was preyed upon every day by a vulture. Hence used allusively. (Vol. XII, 612)

プロメテウスは生命の無いところに生命を吹き込み、火の使用法という新しい知識を人類にもたらしたためにゼウスによってコーカサスの岸壁に張り付けにされた悲劇的な半神半人である。人間は火を利用することを知ってから文明を格段に進歩させることができ、この点でプロメテウスは人類に多大な恩恵を施したのだが、フランケンシュタインが手に入れた知識とは死者を生者に蘇らせる知識であり、このことが破滅的な悲劇を引き起こした。ギリシア神話における元来のプロメテウスは、フランケンシュタインのように錬金術的な夢を科学によって実現しようとする人物の姿によって変形され、現代のプロメテウスという新しい神話像を作り上げている。この現代のプロメテウスは本来のプロメテウスのような英雄的な雰囲気を用意してはおらず、自滅的で大きな罪を背負ったイメージとして捉えられている。

プロメテウスのように命を吹き込む半神半人は錬金術的な考え方とも一致するところがある。既に述べたように、錬金術の思想においては対立する二つの概念や現象が調和することが重要視されていた。そしてフランケンシュタインはこの錬金術の志向に大きく影響を受けたまま電気科学や生物学を学び、死と生をウロボロスのように循環させる夢を実行に移したのであった。

プロメテウスという呼び名はフランケンシュタインのみならず、彼がむさぼり読んだ錬金術師達にも使われていたことがあり、錬金術師たちのイメージとプロメテウスは強い結びつきを持っている。ホームヤードも引用している(144) 次のロバート・バートン (Robert Burton 1577-1640) の『憂鬱の解剖学』(*The Anatomy of Melancholy* 1621) の一節はプロメテウスと形容されるパラケルススとその一派に関する記述である。

Paracelsus and his Chymistical followers, as so many *Promethei*, will fetch fire from heaven, will cure all manner of diseases with

Mineralls, accounting them the only Physicke on the other side.(221
 斜字体は原著者)

現代のプロメテウスと呼ばれるフランケンシュタインではあるが、彼が子供の時に読み耽ったパラケルススとその一派である科学者達もまたプロメテウスと呼ばれ、フランケンシュタインもまた上の“his Chymistical followers”の系譜に加わることになるのである。

以上見てきたように、フランケンシュタインの野望は錬金術の野望が科学的手法と交わった結果、怪物創造という自然の摂理と人間の行動範囲の限界を超える事件を引き起こし、さらにそのおぞましい行為に震え上がったフランケンシュタインは、自らの創造物を放棄することによってさらに恐ろしい一連の悲劇を引き起こすことになった。一連の悲劇によって絶望の淵に立たされながらも、ウォルトンの北極探検を励まし、その意味で今だ人類の力を信じたまま死んでゆく。これがメアリの言う現代のプロメテウスの姿であり、度を越えた知識を得ることや、人造人間を創造することが非常に否定的に捉えられている。現代のプロメテウスとは人類に多大な恩恵を施すどころか、むしろその逆に悲しみと苦しみしかもたらさないマイナス・イメージの強い象徴である。

しかしメアリ・シェリーの夫パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) の詩劇『縛を解かれたプロミーシュース』(*Prometheus Unbound* 1820) に描かれるプロメテウスはこれとは対照的である。この作品は古代ギリシアの悲劇詩人アイスキュロス (Aeschylus) の『縛られたプロメテウス』(*Prometheus Bound*) の続編のような形で書かれ、ジュピターの専横に苦しみ、コーカサスの山に張り付けにされていたプロメテウスがハーキュリーズ (Hercules) によって解放され、専制的な暴君に対する批判と愛と自由の精神の勝利を高らかに歌う作品となっている。パーシーにとって人類に火を与えたプロメテウスは英雄であり、それゆえにジュピターによって苦しめられているプロメテウスを助けることは英雄の勝利、火という知識を得ることの正統性を示すものである。

もし『フランケンシュタイン』をウィリアム・A・ウォーリング (William A. Walling) が指摘するように (46-47)、全能の神とされている存在が単なる幻であって、愛の存在しない支配を描いている作品であると捉えるならば、『縛を解かれたプロミーシュース』と共通する要素を持っていると考えることができる。『フランケンシュタイン』は怪物がその創造者であり支配者であっ

たフランケンシュタインの思い上がりに対して徹底的に復讐し尽くし、『縛を解かれたプロミーシユース』においてはゼウスの圧制を打ち倒し、プロメテウスの愛による勝利を賛美している。

しかし、プロメテウスそのものの捉え方はメアリとパーシーでは正反対になっている。プロメテウスが人間にあたえた火という知識が死体を蘇らせる知識であった場合どうなるであろうか。ここにパーシーのような理想主義的人間の危険性が潜んでいる。もちろん彼が人造人間製造に大賛成してその実現を心から待ち望んでいたわけではない。しかし、彼はオックスフォード（Oxford）大学にいた時分科学実験に没頭しており、さらにバンフレット『無神論の必要性』（*The Necessity of Atheism*）を著してそれを取り下げなかったために、退学処分を受けている（Seymour 124）。このようなパーシーの側面を考慮すると、メアリは意識的にであれ無意識的にであれ結果的にはパーシー的な思想を批判していることになる。科学というものがあまりに人知に思いついた野望と結びついた時の危険性をメアリは感じ取っていたのである。

ただ、ここでメアリを反科学主義の保守的志向に凝り固まった人物と解し、『フランケンシュタイン』を単純な反科学、文明批判と捉えるのは容易な図式化に過ぎている。メアリ自身は科学に関心を持っており、『フランケンシュタイン』執筆までには科学の講義に参加したり（Seymour 166）、当時の科学者ハンフリー・デイヴィー（Humphry Davy）⁹の化学実験に関する書を読んでいて（Seymour 173）、これらの知識が作品創作に一役買っている。彼女が最も恐れていたことは、当時学んでいた科学が中世趣味の願望や、あまりに理想主義に傾いたロマン主義の側面と合体し、いわばロマン主義科学者が誕生することだったのではなかろうか。この作品に描かれる科学者は当時一般の科学者ではなく、異常な情熱に駆られた科学者なのである。

科学とロマン主義の合わさった危険な側面を効果的に表すものとして、既に述べた『フランケンシュタイン』の随所に引用されているコールリッジの『老水夫行』が挙げられる。

ウォルトン船長がフランケンシュタインと出会う前に自分自身を孤独に海をさすらう老水夫と重ね合わせていたことは既に述べたが、第4章でフランケンシュタインが怪物創造直後、あまりの恐ろしさに実験室を飛び出して外をさまよう場面（44）にもこの詩の一節が引用されている。

Like one who, on a lonely road,
 Doth walk in fear and dread,
 And, having once turn'd round, walks on,
 And turns no more his head;
 Because he knows a frightful fiend
 Doth close behind him tread. (461-466)¹⁰

ウォルトン船長のみならず、フランケンシュタインもまた、老水夫のイメージと重ねられているのである。ウォルトンとフランケンシュタインの間には共通して自然の秘められた謎を解明して人類に対する多大な利益をもたらそうとする野望があったが、『老水夫行』がこの二人の両方と関連付けて引用されているのは興味深く、彼らの共通点を効果的に表す一因ともなっている。

『老水夫行』はゴシック趣味的色彩の非常に濃い物語詩であり、また非常に謎めいた詩である。この水夫の呪われた船上の体験は一体何か、彼が意味もなくアホウドリを殺したのはなぜか、彼の乗っている船はどこを目指していたのか、実に様々な解釈が飛び交っている。¹¹ 仮にこの作品を傲慢な飽くなき野望を抱いた人間が呪われてゆく物語と解釈してみると、これはフランケンシュタインやウォルトンの行おうとしていたことと見事に一致する。コールリジ本人の意図したものは何だったのかを断定するのは非常に難しいが、少なくともメアリの解釈は小説中の引用の仕方によって推測できる。老水夫もまた、プロメテウスの人物として捉えられ、フランケンシュタインやウォルトンの系列に並ぶ存在となっている。もっとも、ウォルトンの場合はフランケンシュタインの体験を通して、プロメテウスになることを辞退したが。

パーシー・シェリーとコールリジというロマン主義を代表する詩人の作品が『フランケンシュタイン』においては非常にマイナス・イメージに捉えられ、暗に非難をされているように思われる。中世的、ゴシック趣味的な風潮が単にその情緒を楽しむ範囲で留まればよいが、時代錯誤をして当時の最先端科学と結びついた時、特にそれが自然界の摂理を揺るがす生命操作に関わることをメアリは非常に恐れていたとみることができる。ロマン主義の特徴には空間的、あるいは時間的に遠い神秘なるものに対する憧れがあると同時に、科学に対する強い関心があった。メアリが生きたのはまさにその時代の真っ只中であり、彼女に『フランケンシュタイン』のアイデアが閃いたのも、第3版の序文に書かれているように (170)、シェリーとバイロンとの会話の中で生命原理の発見

とその利用法が話題になったことが大きく関係している。

死者を蘇らせ、永遠の生を得ると言うこともなく自然な流れに反する。錬金術師達の夢は自然の摂理を揺るがすのではなく、その神秘を人間の力によって再現することであり（アロマティコ 24）、その意味においては反自然的ではなかったのだが、その錬金術的な夢が科学の力によって現実的なりアリティーを伴って迫ってくることにメアリは底知れぬ不安感を抱き、それをこの小説に描いている。彼女の不安感はこの作品を読む我々も共有することができる。

メアリの恐れていたロマン主義的傾向のある側面をさらに明らかにするために、ここでもう一人の詩人について論じたい。それはウィリアム・ワーズワス（William Wordsworth）である。『フランケンシュタイン』には彼の詩も引用されているのだが、この詩の引用の効果はパーシーやコールリジとは正反対である。

メアリはフランケンシュタインが亡くなった友人クラークヴァルを思い出し、彼の素晴らしさを讃えている場面でワーズワスの「ティンターン寺院の数マイル上流で詠んだ詩」（“Lines Written a Few Miles Above Tintern Abbey”）¹²を引用している（116）。

————— The sounding cataract
 Haunted *him* like a passion: the tall rock,
 The mountain, and the deep and gloomy wood,
 Their colours and their forms, were then to him
 An appetite; a feeling, and a love,
 That had no need of a remoter charm,
 By thought supplied, or any interest
 Unborrowed from the eye. (斜字体は原著者)

自然界の掟に違反し、そのため自然から嘲られていたように感じていたフランケンシュタインとは反対に、そのようなことは一切知らないクラークヴァルは自然の美しさを讃え、愛することができた。この全く異なる性質を持った登場人物を描くのに、メアリは自然派詩人のワーズワスを引用したことは興味深い。

メアリはパーシーやコールリジの引用によって間接的にロマン主義の一側面を非難したが、同じロマン主義詩人であるワーズワスは批判の対象から除外されている。それはワーズワスの作品が親自然の立場でその美しさや神秘を歌っ

ていたからである。パーシーやコールリジの作品はその理想や中世趣味が一步間違えば反自然となりうる可能性を持っており、そのことに対してメアリが抱いていた大きな心配が『フランケンシュタイン』には込められているのではないだろうか。

結 論

フランケンシュタインは少年時代の錬金術に対する憧れを科学の力を借りて実現してしまった。死者を蘇らせ、人類を死の恐怖から救うという野望は、実は中世の錬金術師達の考えていたことと共通したものを持っており、フランケンシュタインの実験は非常に錬金術的であることは今まで述べてきたとおりである。中世的な野望を当時の最先端の技術を応用して実現化してしまったことにこの悲しい物語の原因がある。中世的なものの考え方は、あくまでその当時のものであり、それを時代錯誤して最先端科学で実現化しようという試みは極めて危険であることがこの作品中に示されている。この危険な科学者が『フランケンシュタイン』の副題『現代のプロメテウス』の意味である。

中性的、ゴシック的、神秘的な世界に憧れを持つロマン主義が反自然の立場で科学と見境無く結びついた時、この現代のプロメテウスは生まれる。メアリはフランケンシュタインにプロメテウスという呼び名を与え、さらにコールリジの巧みな引用によってロマン主義の一側面を批判している。メアリはパーシー、コールリジ、バイロンといった革新的な人物達と交流があったのだが、『フランケンシュタイン』に見受けられるメアリ自身のメッセージは彼らの思想とは対立するところがあり、やや保守的なものであるように思われる。あるいは、彼女の周辺人物達の思想があまりに急進的過ぎたのかもしれない。そしてそれらに対する恐怖心がこの作品に投影されているのである。

『フランケンシュタイン』は確かにゴシック的色彩の強い恐怖物語であり、怪物製作とその放棄、続いて引き起こされる怪奇な殺人事件の数々と、恐ろしい描写が次々と我々の前に圧倒的な迫力を持って展開される。しかし『フランケンシュタイン』が単なるゴシック小説と違って際立っているのは、いたずらに恐怖心を煽るばかりが目的のではなく、ゴシック小説的な雰囲気をもとにして読者を楽しませながらも、実際はこの残酷な物語を引き起こした原因であるロマン主義と結びついた科学に対する警告を我々に与えているのである。ただし『フランケンシュタイン』に反ロマン主義的側面が含まれているといつて

も、それは古典主義的あるいはヴィクトリア朝的という意味ではない。合理主義的精神ではなく、激しい感情や無思慮な人間の欲望がこの作品を構築しているのだが、それでいて私達に考えさせるところは大きいのであり、中世趣味とロマン主義の結びつきの危険性を訴え、その反省をこの作品が促しているながらも、それでいて物語全体が説教臭くなっていないのはメアリの手腕によるものである。

『フランケンシュタイン』が出版されて200年近くが経過するが、中世的世界や考え方に対する興味は現在でも消え失せてはいない。それにこの約200年間における科学の進歩はめざましく、メアリの時代よりもフランケンシュタイン的の野望を満たす技術的能力は高くなっているといえよう。たとえ死者を蘇らせることが不可能であっても、人間は死ななくなるのでは、あるいは人間の複製ができるのでは、という問題は現在さかんに議論されている。おそらくこのような不安が存在し続ける限り、『フランケンシュタイン』はリアリティーを持って読まれ続けるであろう。もしもこの物語が今よりもその魅力を失う時が来るとすれば、それはフランケンシュタイン風の実験がごく当たり前に行われる時代であろう。そのような時代にあっては『フランケンシュタイン』に描かれる実験に何の斬新さも見出せなくなってしまうからだ。そのような時代が到来しないことをひたすら望む。

注

- 1 以下のクローン技術を巡る一連の出来事は「読売新聞」2001年8月16日付、朝刊第7面の「クローン人間是か非か」に拠った。
- 2 例えばジョン・ターニー (John Turney) は『フランケンシュタイン』の怪物創造の物語が後世人々の間で神話化され、20世紀のDNA解析や分子生物学と深く交わりながら今日までに至ったことをジャーナリスティックな視点で詳細に論じている。また、モネット・ヴァカン (Monette Vaquin) は『フランケンシュタイン』の解釈を19世紀の優生学から、ヒトラーのユダヤ人虐殺、体外受精にまでに押し進めており (pp.149-221)、これを読む読者は背筋が凍るであろう。
- 3 以下括弧内の数字はページ数を示す。但しコールリジとワーズワスの詩では行数を示す。『フランケンシュタイン』のテキストは *The Mary Shelley Reader*. Ed. Betty T Bennett and Charles E Robinson. に拠った。初版の1818年版テキストである。なお、後で引用した1831年版におけるメアリの序文もこのテキスト所収のものに基づく。
- 4 Samuel Taylor Coleridge *The Rime of the Ancient Mariner*, 『抒情民謡集』 (*Lyrical*

- Ballads* 1798) 所収。内容は船上の婚礼の宴の席に突然現れた老水夫が、自らの恐ろしい呪われた航海の顛末を語るものである。本論において『フランケンシュタイン』中に引用されている『老水夫行』はその引用をそのまま使用した。それ以外は *The Rime of the Ancient Mariner*. Ed. Paul H. Fry の 1798 年版を使用した。
- 5 第 3 版のテキストは *Frankenstein or the Modern Prometheus (The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol. 1). Ed. Nora Crook を参考にした。
 - 6 Cornelius Agrippa (1486-1535) ドイツの錬金術師。Paracelsus (1493-1541) スイスの錬金術師。Albertus Magnus (1193-1280) ドイツのラテン学者、自然科学者で錬金術に関する著作もある。あのトマス・アクィナス (Thomas Aquinas) も彼の弟子になった (E. J. ホームヤード [Eric John Holmyard] 93)。
 - 7 なぜ、これほどまでに錬金術は象徴的に記述されたのかということ、それは錬金術の知識を伝授すべきものと、そうでない者とを区別するためであった。難解な記述を解読できる知恵を持ったものだけが錬金術書を読むことが出来た (アロマティコ 46-49)。
 - 8 John Milton (1608-74), *Paradise Lost* (1667); Plutarch (?46-?120), *Parallel Lives*; J.W. von Goethe (1749-1832), *The Sorrows of Young Werther* (1774)。
 - 9 英国の化学者で、電気分解によるアルカリ、アルカリ土金属の分解、カルシウム、バリウム、マグネシウムの遊離に成功した。マイケル・ファラデー (Michael Faraday 1791-1867) は若い時に彼の弟子を務めた (ルセルクル 204)。また、コールリジの友人でもある。
 - 10 *The Rime of the Ancient Mariner*. Ed. Paul H. Fry. では 461 行目の who は that となっている。
 - 11 キリスト教的な寓意を含んでいると見る批評や、世界に拡張してゆくヨーロッパの帝国主義、奴隷船、暴徒と化したフランス革命を読み取る批評等がある (Fry 84-85)。
 - 12 『抒情民謡集』 (*Lyrical Ballads*) 所収。なお、ワーズワスの元のテキスト (1798 年版) は以下のようになっていて、78、80 行目の "him" は "me" に、81 行目のセミコロンはコロンになっている。

————— The sounding cataract
 Haunted me like a passion: the tall rock,
 The mountain, and the deep and gloomy wood,
 Their colours and their forms, were then to me
 An appetite: a feeling, and a love,
 That had no need of a remoter charm,
 By thought supplied, or any interest
 Unborrowed from the eye. (77-84)

上記の引用は William Wordsworth, *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Eds.

James Butler and Karen Green に基づく。

参考文献目録

A. 洋書

- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. Eds. Nicolas K. Kiessling, Thomas C. Faulkner and Rhonda L. Blair. Vol. 2. Oxford: Clarendon P, 1990.
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Rime of the Ancient Mariner*. Ed. Paul H. Fry. Boston: Bedford/St. Martin's, 1999.
- Godwin, William. *Caleb Williams: or Things as They Are*. Ed. Maurice Hindle. London: Penguin, 1988.
- Levine, George. "The Ambiguous Heritage of Frankenstein." *Critical Essays on Mary Wollstonecraft Shelley*. Ed. Mary Lowe-Evans. New York: G.K. Hall, 1998.
- Seymour, Miranda. *Mary Shelley*. London: Murray, 2000.
- Shelley, Mary. *The Mary Shelley Reader*. Eds. Betty T. Bennett and Charles E. Robinson. New York: Oxford UP, 1990.
- . *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Ed. Nora Crook. Vol. 1. London: Pickering, 1996.
- Shelley, Percy Bysshe. *Shelley's Poetry and Prose*. Eds. Donald H. Reiman and Sharon B. Powers. New York: Norton, 1977.
- Veeder, William. *Mary Shelley and Frankenstein: the Fate of Androgyny*. Chicago: U of Chicago P, 1986.
- Walling, William A. *Mary Shelley*. New York: Twayne, 1972.
- Wordsworth, William. *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Eds. James Butler and Karen Green. NY: Cornell UP, 1922.
- "Prometheus." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon P, 1989.

B. 和書

- アンドレア・アロマティコ, 種村季弘訳. 『錬金術』(「知の再発見」双書 72) 創幻社, 1997.
- クリス・ボルディック, 谷内田浩正/西本あづさ/山本秀行訳. 『フランケンシュタインの影の下に』国書刊行会, 1996.
- E・J・ホームヤード, 大沼正則監訳. 『錬金術の歴史：近代科学の起源』朝倉書店, 1996.
- J = J・ルセルクル, 今村仁司 / 澤里岳史訳. 『現代思想で読むフランケンシュタイン』(講談社選書メチエ 105) 講談社, 1997.
- パーシー・ビッシュ・シェリー, 石川重俊訳. 『縛めを解かれたプロミーシユース』(岩

- 波文庫) 岩波書店、1957.
- クロスビー・スミス、「フランケンシュタインと自然の魔力」ステイーヴン・バン編、遠藤徹訳『怪物の黙示録』青弓社、1997. 52-81
- ジョン・ターニー、松浦俊輔訳、『フランケンシュタインの足跡：バイオテクノロジーと現代の神話』青土社、1999.
- モネット・ヴァカン、辻由美訳、『メアリ・シェリーとフランケンシュタイン』パピルス、1991.
- H・G・ウェルズ、橋本楨矩／鈴木万里訳、『モロー博士の鳥 他九編』(岩波文庫) 岩波書店、1993.
- 澤井繁男、『錬金術：宇宙論的生の哲学』(講談社現代新書 1128) 講談社、1992.
- 「クローン人間是か非か」『読売新聞』朝刊 2001年8月16日、7面.

Frankenstein and the Hermetic Science
— The Dangerous Aspects of Romantic Ambition —

Jun Ichikawa

Recent scientific technology is so developed that it can produce even human clones theoretically. A lot of people are afraid that human copies could be produced in the future. *Frankenstein; or the Modern Prometheus* (1818) written by Mary Shelley has been often read as an allegory for the excessive modern science of our age. The story of a mad scientist has been mythologised and spread all over the world irrespective of the original text.

There is a big difference, however, between Frankenstein's and modern science. His ambition is reared by alchemists' books in the Middle Ages. His dream to make the mortal immortal is closely related to their thought, and he utilises brand-new technology of his age to satisfy his own curiosity. The succession of tragical murders after creating a monster in this novel is caused by Frankenstein's abnormal science which is strongly connected with medieval alchemy.

His inclination toward science and alchemy in the Middle Ages is among many aspects of the Romantic literature. Mary Shelley uses Prometheus and cites lines from the *Rime of the Ancient Mariner* (1798) by Samuel Taylor Coleridge to warn the danger of Romanticised science. Though Prometheus was admired in the Romantic period as a symbol of liberation from tyrannical domination as we see in Mary's husband's *Prometheus Unbound* (1820), his role in this novel is rather negative. *Frankenstein* has some points which are opposed to Romantic literature.

The main purpose of this graduation thesis is to examine Frankenstein's science from the viewpoint of alchemy and discuss the place *Frankenstein* occupies in the Romantic literature. In chapter one to three we will examine Frankenstein's creation of a monster by alchemical science and the following revenge by the monster along the text. In chapter four, based on the relationship between science and alchemy, I will deal with the meaning of "the Modern Prometheus" comparing it with some other works by Romantic poets.